

種々な神仏の話（三話） = = = 三州横山話より

金白天王

村の中央に万燈山という眺望のいい山があって、往時は七月十五日夜、村の各戸から松火を一一把ずつ持ち寄って、万燈を炊いたと言いますが、現在は六月一五日に、尾張の津島神宮からお札を迎えて来て、山の裾に、檜の葉でオタク様という祠の代用みたいなものをこしらえて、その中にお札を祀って、豆提灯などを連ねて祭りをしました。

山の頂上に、稲荷と天王を祀った祠が並んでいて、天王様と呼んでいましたが、明治の初年に、この稲荷が一時非常にはやったことがあったと言います。現在はほとんど参詣者もなく荒廃していますが、近年麓に住む山口吉三郎というものが、狐を捕ろうと罠を懸けたところが、その夜の夢に白髪の老翁が顕れて、われは万燈山に住むコンパク大王なり、早々罠を取り払えよと命じて、忽然と消え失せたなどと言いました。

伽藍様

万燈山の北よりの字長畑に、ガラン様と呼んでいる堂があって、これに安置した仏像は、おはらこもりの本尊と言って、胎内に小仏を蔵しているもので、村のものは、比類のない名作と信じていたと言うことですが、明治初年の神仏合祀の禁令に触れることがあると言って、堂を取り壊した時、村の報恩寺へ持ち込んでおいて、明治三四年報恩寺の焼失と同時に烏有に帰したと言います。

境内に見事な紅葉の樹と、巨きなタマの樹（桂）があったそうですが、紅葉の樹は、明治一五、六年頃、附近の家に一宿を求めた若い御岳講の道者が、如何な事情のあつてか、翌朝未明に出立して、この紅葉の枝で縊死したため、そのおり伐り除ってしまったと言いますが、タマの樹は堂と一緒に伐り払われたそうです。

その後久しい間、堂の跡は空地になっていて、雑草の茂るに委せてあって、ここの草を刈れば、蛇の祟りがあるなどと言って、近づくものもなく、タマの樹の根株と、昔からの、ガラン様の祠が残っていましたが、近年村で共有地の整理をするについて、村の某というものに売り渡したそうです。その男は神も仏もない男で、たちまち雑草を刈り取って、開墾して畑にしたそうですが、何の祟りもないと言います。もっともここに祀ってあったガラン様の祠を、報恩寺の境内へ祀り替えたからともいいます。

郷倉（ごーくら）

徳川時代には、この堂の傍らに郷倉と言って、村の年貢米を一時納入しておいた建物があったそうですが、明治一〇年頃取り壊したと言います。

山へ捨てられた辻堂

神仏合祀の禁令に触れたものは、堂の他に、字追分の、飯田街道から鳳来寺への岐れ道に建っていた辻堂があったそうです。中に安置された本尊は石彫の千手観音で、高さが三尺もあるものだったそうですが、蓮台だけは取って、辻の路標の台にして、辻堂は仏像を入れたまま、村のものが総出で舁いで村境の山へ捨てたと言います。その後、辻堂は腐って中にあった仏像のみが蔓草の絡むに委せて転がっているのを、五、六年前までは見たと言います。